

中国農村出身の流動児童の移住地への溶け込みに対する社会関係資本の影響

—寧波市の流動人口家庭を対象として—

ZHANG Le

中国では1998年代以降、流動児童が急増し、就学機会の不平等や戸籍・教育制度を介した制度的排除に関する研究が蓄積してきた。しかし、流動児童の都市社会への溶け込みは、短期的な「社会適応」とは異なり、移住先を「所属の場」とみなす主観的再配置や、都市住民としてのアイデンティティ形成を含む深層の過程である。既存研究では「都市適応」「社会的溶け込み」「学校溶け込み」等の概念が混在し、制度分析(マクロ)と日常的支援(ミクロ)の知見が十分に接続されてこなかった。また、国際移民研究が強調してきた社会的統合の「双方向性」と「過程性」を踏まえるなら、溶け込みは制度条件だけでなく、日常の相互作用と社会関係資本の編成のなかで更新される。そこで本研究は、社会関係資本を家庭・学校・地域社会にまたがる多層的な関係構造として捉え、資源アクセスをめぐる「構造的溶け込み」と、受容感・安心感・帰属意識をめぐる「心理的溶け込み」を区別したうえで、保護者の社会関係資本が子どもの溶け込みにいかなる経路で作用し、子ども自身の社会関係資本の形成を通じてどのように再編されるのかを明らかにする。

調査地は中国沿海大都市の寧波市である。子どもが義務教育段階にある農村出身の流動家庭を対象に、スノーボール法で協力者を募集した。2025年1月から10月にかけて8世帯・計15名へ半構造化インタビューを実施し、1回あたり約60分を目安に家庭または公共施設で行った。協力世帯は安徽省出身が多く、保護者の学歴は小卒から高卒程度まで、職業は自営業や非正規雇用が中心である。面接は筆者が中国語で実施し、録音・逐語化した資料をもとに、保護者と子どもの語りを整合しながら世帯間比較を行った。

分析結果として、第一に、保護者の社会関係資本は、(1)親族・同郷ネットワークを中核とする結束型、(2)職場関係や教育関係を足場とする道具的橋渡し型、(3)学校・行政など公的機構との継続的関わりが生活維持と就学接続を支える制度依存型的社会関係資本に整理でき

た。これらは就学ルートや学校類型、居住環境を通じて流動児童の溶け込みプロセスの初期条件となっている。構造的溶け込みでは、結束型社会関係資本を基盤に公立学校の主ルートへ接続できた事例があるのに対して、中心市街地ではポイント制等の競争のもと、教師や仲介者といった橋渡しを動員しても私立学校や周縁的な公立学校への「振り分け」を経験し、制度的境界そのものは変えられない現実が確認された。また資源アクセスは家庭と学校に集中し、地域社会は多くの事例で十分な溶け込みの場になっていない。第二に、子どもの社会関係資本は、地元児童を含む橋渡し型、流動児童同士の結束型として現れ、保護者の資本構造を継承する場合と、学校制度・学級編成・本人の志向性、さらにオンライン環境を通じて乖離・再編される場合が併存した。第三に、心理的溶け込みは、教師から「一律に扱われる」経験や学級内の協働・遊びを媒介に形成される一方、同質的な学校・居住環境では地元児童との心理的距離が解消されないまま残る。結果として、都市を拠点と感じる経路、制度上の周縁性と心理的揺らぎが併存する経路、出身地への帰属を保持しつつ生活実践で都市への傾斜を強める二重アイデンティティ型など、複数の心理的溶け込み経路が明らかになった。

このように、流動児童の溶け込みは属性や単一制度要因に還元できず、結束型と橋渡し型(制度的社会関係資本を含む)の組み合わせが、構造的・心理的溶け込みを長期的に方向づける媒介装置として機能することが示された。とくに「制度的橋渡し型社会関係資本」という視角を提示し、社会関係資本論を私的ネットワーク中心の理解から「制度とネットワークの結節面」へ拡張した点に新規性がある。実践的には、就学情報の非対称性を緩和する窓口整備、学校現場での関係づくり、地域レベルでの継続的関わりを通じた制度的社会関係資本の形成が課題である。本研究は寧波市の8世帯に限定された質的分析であり、教師・行政・地域住民側の視点の導入や長期調査、特定時点におけるものであり、社会関係資本の変化や溶け込みのプロセスを長期的に追跡することはできていない。今後は、他都市や農村部を含む比較調査を通じて、流動児童をめぐる社会関係資本の構造および溶け込みのパターンを相対化し、本研究で得られた知見の位置づけを検討する必要がある。加えて、連結型社会関係資本との理論的關係性についても、さらなる精緻化が今後の課題として残されている。